

# 二十世紀旗手

——（生れて、すみません。）

太宰治

青空文庫



序唱 神の焰ほのおの苛烈かれつを知れ

苦悩たかきが故に尊からず。これでもか、これでもか、生垣へだてたる立たち葵あおいの二株、おたがい、高い、高い、ときそつて伸びて、伸びて、ひよろひよろ、いじけた花の二、三輪、あかき色の華美を誇りし昔わすれ顔、黒くしなびた花卉しわの皴しわもかなしく、「九天たかき神の園生そのう、われは草鞋わらしのままにてあがりこみ、たしかに神域犯したてまつりて、けれども恐れず、この手でただいま、御園の花を手折たおつて来ました。そればかりでは、ない。神の昼寝の美事な寝顔までも、これ、この眼で、たしかに覗のぞき見してまいりましたぞ。」などど、旗取り競争第一着、駿足の少年にも似たる有頂天の姿には、いまだ愛くるしさも残りて在り、見物人も微笑、もしくは苦笑もて、ゆるしていたが、一夜、この子は、相手もあろに氷よりも冷い冷い三日月さまに惚ほれられて、あやしく狂い、「神も私も五十歩百歩、大差ござらぬ。あの日、三伏さんぶくの炎熱、神もまたオリンピックク模様の浴衣ゆかたいちまい、腕まくりのお姿でござった。「聞くもの大笑せぬはなく、意外、望外の拍手、大喝采。ああ、かの壇上の青黒き皮膚、瘦狗せうこそのままに、くちばし突出、身の丈ひよろひよると六尺にち

かき、かたち老いたる童子、実は、れいの高い高いの立葵の精は、この満場の拍手、叫喚の怒濤を、目に見、耳に聞き、この奇現象、すべて彼が道化役者そのままの、おかしの風貌ゆえとも気づかず、ぶくぶくの鼻うごめかして、いまは、まさしく狂喜、眼のいろ、いよいよ奇怪に燃え立ちて、「今宵七たなばた夕まつりに敢えて宣言、私こそ神である。九天たかく存おわします神は、来る日も来る日も昼寝のみ、まったくの怠慢。私いちど、しのび足、かれの寝所に滑り込んで神の冠、そつこの大頭おおあたまへ載せてみたことさえございます。神罰なんぞ恐れんや。はっはっは。いつそ、その罰、拝見したいものではある！」予期の喝采、起らなかつた。しんとなつた。つづいてざわざわの潮ざい、「身のほど知らぬふざけた奴。」「神さま、これこそ夢であるように。きやつ！ この劇場には鼠がいますね。」「賤民の増長傲慢ごうまん、これで充分との節度を知らぬ、いやしき性よ、ああ、あの貌かお、ふためと見られぬ雨蛙。」一瞬、はっし！ なかば喪心の童子の鼻柱めがけて、石、投ぜられて、そのとき、そもそも、かれの不幸のはじめ、おのれの花の高さ誇らむプライドのみにて仕事するから、このような、痛い目に逢うのだ。芸術は、旗取り競争じやないよ。それ、それ。汚い。鼻血。見るがいい、君の一点の非なき短篇集「晩年」とやらの、冷酷、見るがいい。傑作のお手本、あかはだか苦しく、どうか蒲がまの穂敷きつめた暖き寝所つくって下

さいね、と眠られぬ夜、蚊帳かやのそとに立つて君へお願いして、寒いのであろう、二つ三つ  
 大きいくしやみ残して消え去った、とか、いうじやないか。わが生涯の情熱すべてこの一  
 巻に収め得たぞ、と、ほつと溜息もらすまも無し、罰だ、罰だ、神の罰か、市民の罰か、  
 困難不運、愛憎転変、かの黄金の冠を誰知るまいとこつそりかぶつて鏡にむかい、につと  
 ひとりで笑つただけの罪、けれども神はゆるさなかつた。君、神様は、天然の木枯こがらしと同  
 じくらいに、いやなものだよ。峻しゅん 巖げん、執しつ 拗よう、わが首すじおさえては、ごぼごぼ沈め  
 て水底這わせ、人の子まさに溺死できしせんとせつなの刹那、すこし御手ゆるめ、そつと浮かせていた  
 だいて陽の目うれしく、ほうと深い溜息、せめて、五年ぶりのこの陽を、なお念いりにお  
 がみましよう、と、両手合せた、とたん、首筋の御手のちから加わりて、また、また、五百  
 何十回めかの沈下、泥中の亀の子のお家来になりに沈んでゆきます。身を捨ててこそ浮ぶ  
 瀬あるものでして、と苦勞人の忠告、その忠告は、まちがっています。いちど沈めば、ぐ  
 うとそれきり沈みきりに沈んで、まさに、それっきりのばあ、浮ぶお姿、ひとりでもあつ  
 たなら、拝みたいものだよ。われより若き素直の友に、この世のまことの悪を教えむもの  
 と、坐り直したときには、すでに、神の眼、ぴかと光りて御左手なるタイムウオッチ、そ  
 ろそろ沈下の刻限を告げて、「ああ、また、また、五年は水の底、ふたたびお眼にかかれ

ますかどうか。「神の胴間声どうまじえ、「用意！」「こいしくば、たずねきてみよ、みずの底、ああ、せめて、もう一言、あの、——」聞ゆるは、ただ、波の音のみにて。

壺唱　ふくろうの啼なく夜かたわの子うまれけり

さいさきよいぞ。いま、壺唱、としたためて、まさしく、奇蹟きせきあらわれました。ニツケル小型五銭だまくらいの豆スポット。朝日が、いまだあけ放たぬ雨戸の、釘穴をくぐって、ちようど、この、「壺唱」の壺の字へ、さつと光を投入したのだ。奇蹟だ、奇蹟だ、握手、ばんざい。ばからしく、あさまし、くだらぬ騒ぎやめて、神聖の仕事はじめよ。はいと答えて、みち問えば、女、唾おしなり、枯野原。問うだけ損だよ、めくらめつぼう、私はひとり行くのだと悪ふざけして居る間に、ゼラチンそろそろかたまつて、何か一定の方向を指示して呉れないものでもない、心もとなき杖をたよりに、一人二役の掛け合いまんざい、孤立の身の上なれども仲間大勢のふりして、且かつうたい、且かたり、むずかしき一篇のロマンスの周囲を、およそ百日のあいだ、ぬき足、さし足、カナリヤねらう黒ひとみき瞳濡れたる小猫の様にて、そろりそろり、めぐりあるいて、およろこび下さい、ようやく昨夜、語る糸口

見つけましたぞ、お茶を一ぱい飲んで、それから、ゆっくり。

お話のまえに、一こと、おことわりして置きたいこと、ほかではごさいませぬ、ここには、私すべてを出し切つて居ませんよ、という、これはまた、おそろしく陳腐の言葉、けれどもこれは作者の親切、しょうがくぼう正覚坊のこうち甲羅ほどの氷のかけら、どんぶりこ、どんぶりこ、のどかに海上ながれて来ると、老練の船長すかさずさつと進路をかえて、危い、危い、突き当たたら沈没、氷山の水中にかくれてある部分は、そうですねえ、あのまんじゅう笠くらしいのものにしたところで、水の中の根は、河馬五匹の体積、充分にごさいます。きみもまた、まこと、われを知りたく思つたときには、わが家たずねてわれと一週間ともに起居して、眠るまも与えぬわがそよ舌の盛観にしたしく接し、そうして、太宰の能力、それも十分の一くらい、やつと、さぐり当てることができるのじやないか、と此の言葉の、ほぼ正確なることを信じてよろしい。一語はつするということは、すなわち、二、三千の言葉を逃がす冷酷むざんの損失を意味して居ります。そうして、以上の、われにも似合わぬ、幼き強がりの言葉の数々、すべてこれ、わが肉体滅亡の予告であること信じてよろしい。二度とふたたびお逢いできぬだろう心もとなさ、い謂わば私のゴルゴタ、と訳けばされこうべ髑髏、ああ、この荒涼の心象風景への明確なる認定が言わせた老いの繰りごと。れいの、「いの

ち」の、もてあそびではない。すでに神の罰うけて、与えられたる暗たんの命数にしたがい、今さら誰を恨うらもう、すべては、おのれひとりの罪、この小説書きながらも、つくづくと生き、もて行くことのもの憂く、まったくもつて、笹の葉の霜、いまは、せめて佳品の二、三も創りお世話になったやさしき人たちへの、わが分相応のささやかなお礼奉公、これぞ、かの、死出の晴着のつもり、夜々、ねむらず、心くだいて綴り重ねし一篇のロマンス、よし、下品のできであろうと、もうそのときは私も知らない。罪、誕生の時刻に在り。

弐唱 段数漸ぜんげん減げんの法

だんだん下に落ちて行く。だんだん上に昇ったつもりで、得意満面、扇子をさつとひらいて悠悠涼を納めながらも、だんだん下に落ちて行く。五段落して、それから、さつと三段あげる。人みな同じ、五段おとされたこと忘れ果て、三段の進級、おめでとう、おめでとうと言ひ交して、だらしない。十年ほど経つて一夜、おやおや？ と不審、けれどもその時は、もうおそい。にがく笑つて、これが世の中、と眩つぶやいて、きれいさっぱり諦める。それこそは、世の中。

参唱 同行二人

巡礼しようと、なんと真剣に考えたか知れぬ。ひとり旅して、菅笠すげがきには、同行二人と細くしたためて、私と、それからもう一人、道づれの、その、同行の相手は、姿見えぬ人、うなだれつつ、わが背後にしずかにつきしたがえるもの、水の精、嫋々じょうじょうの影、唇赤き少年か、鼠いろの明石あかし着たる四十のマダムか、レモン石鹼にて全身の油を洗い流して清淨の、やわらかき乙女か、誰と指呼しこできぬながらも、やさしきもの、同行二人、わが身に病いさえなかつたなら、とうの昔、よき音ねの鈴もちて曰いわくあげの青年巡礼、かたちだけで清らかに澄まして、まず、誰さん、某さん、おいとま乞いにお宅の庭さきに立ちて、ちりりと鈴の音にさえわが千万無量のかなしみこめて、庭に茂れる一木一草、これがこんじよ今、生うの見納め、断絶の思いくるしく、泣き泣き巡礼、秋風と共に旅立ち、いずれは旅の土に埋められるおのが果なきさだめ、手にとるように、ありありと、判つて居ります。そうして、そのうちに、私は、どうやら、おぼつかなき恋をした。名は言われぬ。恋をした素ぶりさえ見せられぬ、くるしく、——口くさつても言われぬ、——不義。もう一言だけ、

告白する。私は、巡礼志願の、それから後に恋したのではないのだ。わが胸のおもい、消したくて、消したくて、巡礼思いついたにすぎないのです。私の欲していたもの、全世界ではなかった。百年の名声でもなかった。タンポポの花一輪の信賴が欲しくて、チサの葉いちまいのなぐさめが欲しくて、一生を棒に振った。

#### 四唱 信じて下さい

東郷平八郎の母上は、わが子の枕もと歩かなかつた。この子は、将来きつと百千の人のかしらに立つ人ゆえ、かならず無礼あつてはならぬと、わが子ながらも尊敬、つつしみ、つつしみ、奉仕した。けれども、わが家の事情は、ちがつていた。七ツ、八ツのころより私ずいぶんわびしく、客間では毎夜、祖母をかしらに、母、それから親戚のもの二、三ちらほら、夏と冬には休暇の兄や姉、ときどき私の陰口たたいて、私が客間のまえの廊下とおつたときに、「いまから、あんなにできるのは、中学、大学へはいつてから急に成績落ちるものゆえ、あまり褒め<sup>ほ</sup>めないほうがよろしい。」など、すぐ上の兄のふんべつ臭き言葉、ちらと小耳には喜んで、おのれ！ 親兄弟みんなたばになって、七ツのおれをいじめてい

る、とひがんで了って、その頃から、家族の客間の会議をきらって、もっぱら台所の石の  
 炉縁に親しみ、冬は、馬鈴薯ばれいしょを炉の灰に埋めて焼いて、四、五の作男と一緒にたべた。  
 一日わが孤立の姿、黙視し兼ねてか、ひとりの老婢ろうひ、わが肩に手を置き、へんな文句を教  
 えて呉れた。曰く、見どころがあつて、稽古けいこがきびしすぎ。

不眠症は、そのころから、芽ばえていたように覚えていきます。私のすぐ上の姉は、私と  
 仲がよかつた。私、小学四、五年のころ、姉は女学校、夏と冬と、年に二回の休暇にて帰  
 省のとき、姉の友人、萱野かやのさんという眼鏡かけて小柄、中肉の女学生が、よく姉につれら  
 れて、遊びに来ました。色白くふつくりふくれた丸ぼちやの顔、おとがい二重、まつげ長  
 くて、眠っているときの他には、いつもくるくるお道化ものらしく微笑んでいる真黒い目、  
 眼鏡とつてぱしぱしまたた瞬きながら嗅ぐようにして雑誌を読んでいる顔、熊の子のように無心  
 に見えて、愛くるしく思いました。私より三つも年上だったのに。

もつとさきから、お目にかからぬさきから、私は、あなたのお名前知っていた。姉から  
 の手紙には、こんなことが書かれていました。「梅組の組長さん、萱野アキさん、おまえ  
 がこうしてグミや、ほしもち、季節季節わすれず送ってよこすのを、ほめていました。や  
 さしい弟さんを持つて、仕合せね、とうらやんでいます。おまえの手紙の中の津軽なまり、

仮名ちがいなかったなら、姉は、もつともつとたくさんのお友達に威張れるのに、ねえ、

——

あなたはあの頃、画家になるのだと言って、たいへん精巧のカメラを持っていて、ふるさとの夏の野道を歩きながら、パチリパチリだまって写真とる対象物、それが不思議に、私の見つけた景色と同一、そっくりそのまま、北国の夏は、南国の初秋、まっかに震えて杉の根株にまつわりついている一列の蔦つたの葉に、私がちらと流し眼くれた、とたんに、パチリとあなたのカメラのまばたきの音。私は、そのたびごとに小さい溜息ためいき吐かなければならなかった。けれども一日、うらめしい思いに泣かされたことございました。そのころも、いまも、私やつぱり一村童、大正十年、カメラ珍らしく、カメラ納めた黒鞞くろかわの胴どうら乱らん、もじもじ恥じらいつつも、ぼくに持たせて、とたのんで肩にかつがせてもらって、青い浴衣に赤い絞り染めの兵古帯へこおびすがたのあなたのお供、その日、樹蔭でそつとネガのプレートあけて見て、そこには、ただ一色の乳白、首ふつて不満顔、知らぬふりしてもとの鞞さやにおさめていたのに、その夜の現像室は、阿鼻叫喚あびきょうかん、種板みごとに黒一色、無智の犯人たちまちばれて、その日より以後、あなたは私に、胴乱もたせては呉れなかった。わが既往きやうの失敗とがめず、もいちど信じてだまって持たせて呉れたなら、私のち投げてもプ

レート守ったにちがいない。また、あの頃に、かくれんぼ、あなたは鬼、みんな隠れてしまうのを待つ間ひとり西洋間のソファに埋まり、つまらなそうに雑誌読んでいたゆえ、同じように、かくれんぼつまらない思いの私、かくれなければならぬ番の当の私、ところもあろうに、あなたのソファのかけにかくれた。いいよう、と遠く弟の声して、あなたは雑誌もったまま立っていつて捜しに出かけた。知っている？ わすれているだろうな。すぐに、みんな捜し出されて、そろそろ西洋間へひきあげて、「おさむさんは、まだだよ。」

「いいえ。そのソファのかけにいます。」

私はソファのかけからあらわれた。あなたは、知っている？ 冷くつぶやいた。「だって、あたしは鬼だもの。」

二十年、私は鬼を忘れない。先日、浅田夫人恋の三段飛という見出しの新聞記事を読みました。あなたは、二科の新人。有田教授の、——いや、いうまい。思えば、あのころ、十六歳の夏から、あなたの眉間みけんに、きょうの不幸を予言する不吉の皺しわがございました。

「お金持ちの人ほど、お金にあこがれるのね。お金かせいでこさえたことがないから、お金、とうとく、こわいのね。」あなたのお言葉、わすれていませぬ。公言ゆるせ。萱野さん、あなたは私の兄に恋していました。

先夜、あの新聞の記事読んで、あなたの淋しき思つて三時間ほど、ひとりで蚊帳かやの中で泣いたものだ。一策なし、一計なし、純粹に、君のくるしみに、涙ながした。一銭の報酬いらぬ。その晩、あなたに、強くなつてもらいたく、あなたの純潔信じて居るものの在ることお知らせしたく、あなたに自信もつて生きてもらいたくて、ただ、それだけの理由で、おたよりしようと、インク瓶のキルクのくち抜いて、つまずいた。福田蘭童らんどう、あの人、こんな手紙、女のひとへ幾枚も、幾枚も、書いたのだ。寸分すんぶんちがわぬ愛の手紙を。

五唱 嘘つきと言われるほどの律儀者りちぎもの

まちを歩けば、あれ嘘つきが来た。夕焼あかき雁の腹雲、両手、着物のやつくちに不精者らしくつつこみ、おのおの固き乳房をそつとおさえて、土蔵の白壁によりかかつて立ちならんで居る一群の、それも十四、五、六の娘たち、たがいに見ませ、こつくり首肯うなずき、くすぐつたげに首筋ちぢめて、くつくつ笑う、その笑われるほどの嘘つき、この世の正直者ときわまつた。今朝、ふるさとの新聞にて、なんとか家なる料亭、けしからぬ宿を兼ねて、それも歌舞伎のすつぽん真似まねてボタンひとつ押せば、電気仕掛け、するすると大型ベ

ツド出現の由、読みながら噴き出した。あきらかに善人、女将あるいはギャング映画の影響を受けて、やがて、わが悪の華、ひそかに実現はかったのではないのか、そんな大型の証拠、つきつけられては、ばからしきくらいに絶体絶命、一言も弁解できないじゃないか、ばかだなあ、田舎の悪人は、愛あいきょう嬌あつあつて、たのもしいな。まこと本場の悪人は、不思議や、生き神、生き仏、良心あつて、しつかりもの。しかも裏の事実は一人の例外なしに、堂々、不正の天才、おしやかさんでさえ、これら大人物に対しては旗色わるく、縁えんなき衆しゅう生ゆうじょうと陰口きいた。

六唱　ワンと言えなら、ワンと言います

「前略。手紙で失礼ですがお願いいたします。本社発行の『秘中の秘』十月号に現代学生気質ともいふべき学生々活の内容を面白い読物にして、世の遊学させている父兄達に、なるほどと思わせるようなものを載せたいと思うのです。で、代表的な学校、(帝大、早稲田、慶応、目白女子大学、東京女子医専など)をえらび、毎月連載したいと思います。ついでには、先ず来月は帝大の巻にしたいと思いますが、貴方様にお願ひできないかと思うの

です。四百字詰原稿十五枚前後、内容はリアルに面白くお願いしたいと存じます。締切は、かならず、厳守して頂きたいと存じます。<sup>はなは</sup>甚だ手紙で失礼ですが、ぜひ御承諾下さって御執筆のほど懇願いたします。『秘中の秘』編集部。」

「ははあ、<sup>こうもり</sup>蝙蝠は、あれは、むかし鳥獣合戦の日に、あちこち裏切って、ずいぶん得して、のち、仕組みがばれて、昼日中は、義理がわるくて外出できず、日没とともに、こそそ出歩き、それでもやはりはにかんで、ずいぶん<sup>すき</sup>荒んだ飛びかたしている。そう、そう、忘れていました、たしかに、それに、ちがいない、いや、あなたのことではございませぬ。私内心うち明けて申しましょう。実は、どうも、わが身、きたなき蝙蝠と、そんなに変わらぬ思いがして、どうにも、こうにも、閉口しているのです。生きて行くためには、パンよりも、さきに、葡萄酒が要る。三日ごはん食わずに平気、そのかわり、あの、握りの部分にトカゲの顔を飾りつけたる八円のステッキ買いたい。失恋自殺の気持ち、このごろになつてやつと判つてまいりました。花束を持って歩くこと、それから、この、失恋自殺と、二つながら、中学校、高等学校、大学まで、思うさえ背すじに冷水はしるほど、気恥ずかしき行為と考えていましたところ、このごろは、白き花一輪にさえほっと救いを感じ、

わが、こいこがれる胸の思いに、気も遠くなり、世界がしんとなって、砂が音なく崩れるように私の命も消えてゆきそうで、どうにも窮して居ります。からだのやり場がございませぬ。私は、荒んだ遊びを覚えました。そうして、金につまった。いまも、ふと、蚊帳の中の蚊を追ひ、わびしき、ふるさとの吹雪と同じくらいに猛烈、数十丈の深さの古井戸に、ひとり墜落、呼べども叫べども、誰の耳にもとどかぬ焦慮、青苔ぬらぬら、聞ゆるはわが木霊のみ、うつろの笑い、手がかりなきかと、なま爪はげて血だるまの努力、かかる悲惨の孤独地獄、お金がほしくてならないのです。ワンと言えなら、ワン、と言います。どんなにも面白く書きますから、一枚五円の割でお金下さい。五円、もとより、いちどだけ。このつぎには、五十銭でも五銭でも、お言葉にしがいますゆえ、何卒、いちど、たのみます。五円の稿料いただいても、けっしてご損おかけせぬ態の自信ございます。拙稿きつと、支払ったお金の額だけ働いて呉れることと存じます。四日、深夜。太宰治。」

「拝復。四日深夜附貴翰<sup>きかん</sup> 拝<sup>はい</sup> 誦<sup>しよう</sup>。稿料の件は御希望には副<sup>そ</sup>えませんが原稿は直ちに御執<sup>と</sup>りかかり下さる様お願い申します。普通稿料一円です。先ずは御返事まで。匆々<sup>そうそう</sup>。『秘中の秘』編輯部。」

「お葉書拝読。四日深夜、を、ことさらに引用して、少し意地がわるい。全文のかげにて、ぶんぶんお怒りの御様子。私、おのれ一個のプライドゆえに五円をお願いしたわけではなかつたのです。わが身ひとつのための貪慾に非ず、名知らぬ寒しき人に投げ与えむため、または、かのよき人よろこばせむための金銭の必要。けれども、いまは、詮なし。急に小聲で、——それでは、書かせていただきます。太宰治。」

七唱 わが日わが夢

——東京帝国大学内部、秘中の秘。——

(内容三十枚。全文省略<sup>カット</sup>。)

八唱 憤怒<sup>ふんぬ</sup>は愛慾<sup>あいよく</sup>の至高<sup>けいこう</sup>の形貌<sup>けいぼう</sup>にして、云々

「ちよつと旅行していました留守に原稿やら、度々の来信に接して、失礼しました。が、

原稿は相当ひどい原稿ですね。あれでは幾らひいき目に見ても使えません。書き直して貰っても駄目かと思えます。貴兄にとつてはあれが力作かも知れませんが、当方ではあれは迷惑ですし、あれで原稿料を要求されても困ると思えます。いづれ、貴兄に機会があればお詫びするとして取敢えず原稿を御返却いたします。勿々。『秘中の秘』編集部。」

月のない闇黒あんこくの一夜、湖心の波、ひたひたと舟の横腹を舐なめて、深さ、さあ五百ひろはねえずらよ、とかこの子の無心の答えに打たれ、われと、それから女、凝ぎょうぜん然の恐怖、地獄の底の細き呼び声さえ、聞えて来るような心地、死ぬることさえ忘却し果てた、あの夜の寒い北風が、この一葉のハガキの隅からひようひよう吹きすさびて、これだから家へかえりたくないのだ、三界に家なき荒涼の心もてあまして、ふらふら外出、電車の線路ふみ越えて、野原を行き、田圃を行き、やがて、私のまだ見ぬ美しき町へ行きついた。

行くところなき思いの夜は、三十八度の体温を、アスピリンにて三十七度二、三分までさげて、停車場へ行き、三、四十銭の切符を買い、どこか知らぬ名の町まで、ふらと出かけて、そうして、その薄暗き盛り場のろろ歩いて、路のかたわら、唐突の一本の松の枝ぶり立ちどまって見あげなどして、それから、ふところの本を売って、活動写真館へは

いる。入口の風鈴の音わすれ難く、小用はたしながら、窓外の縁日、カアバイド燈のまわりの浴衣着たる人の群ながめて、ああ、みんな生きている、と思つて涙が出て、けれども、「泣かされました」など、つまらぬことだ、市民は、その生活の最頂点の感激を表現するのに、涙にかきくれたる様を告白して、人もおのれも深く首肯うなずき、おお、お、かなしかろ、と底の底まで、割り切れたる態にて落ちついているが、それでは、私は、どうする。一日一ぱい、人に知られず、くやし泣きに泣いてばかりいる、この私は、どうする。その日も、私は、市川の駅へふらと下車して、兄いもうと、という活動写真を見もてゆくにしたがい、そろそろ自身狼狽ろうばい、齒くいしばつても歎歎きよきの声、そのうちに大声出そうで、出そうで、小屋からまろび出て、思いのたけ泣いて泣いて泣いてから考えた。弱い、踏みにじられたる、いまさら恨み言うらみえた義理じやない人の忍びに忍んで、こらえにこらえて、足げにされたる塵芥、腐つた女の、いまわのきわの一すじの、神への抗議、おもんの憤怒が、私を泣かせた、ここを忘れてはならない、人の子、その生涯に、三たび、まことに憤怒することあるべし、とモオゼの眩つぐやき。

どのような人でも、生きて在る限りは、立派に尊敬、要求すべきである。生あるもの、すべて世の中になくてかなわぬ重要な齒車、人を非難し、その人の尊さ、かれのわびしき、

理解できぬとあれば、作家、みごとに失格である。この世に無用の長物ひとつもなし。蘭ら童どうあるが故に、一女優のひとすじの愛あらわれ、菊池寛の海容かいようの人情讃えられ、または蘭童らんどうかかりつけの××の閨房けいぼうに御夫人感謝のつましき白い花咲いた。

——お葉書、拝見いたしました。が、ぼくの原稿、どうしても、——だめですか？

——ええ。だめですねえ。これ、ほかの人書いて下さった原稿ですが、こんなのがいいのです。リアルに、統計的に、とにかく、あなたの原稿、もういちど、読んでみて下さい。そうして、考えて下さい。

——ぼく、もともとから、へたな作家なんだ。くやし泣きに、泣いて書くより他に、てを知らなかった。

——失恋自殺は、どうなりました。

——電車賃かして下さい。

——……………。

——あてにして来たので、一銭もないのです。うちへかえればございます。すぐお返しできます。一円でも、二円でも。

——市内に友人ないのか。

——赤羽におじさん居ります。

——そんなら歩いてかえりたまえ。なんだい、君、すぐそこじゃないか。お濠ほりをぐるつとめぐつて、参謀本部のそこから、日比谷へ出て、それから新橋駅へ出て、赤羽は、その裏じゃないか。

——そうですか、——じゃ、——ありがとう。

——や、しつけない。また、あそびに来たまえ。そのうち、何か、うめ合せしよう、ね。

やっぱり怒れず、そのまま炎天の都塵、三度も、四度も、めまいして、自動車にひかれたく思つて、どんだん道路横断、三里のみちを歩きながら、思うことには、人間すべて善玉だ。豪雨の一夜、郊外の泥道、這うようにして荻窪の郵便局へたどりついて一刻争う電報たのんだところ、いまはすでに時間外、規定の時を七分すぎて居ります。料金倍額いだきましよう。私はたと困惑、濡れ鼠のすがたのまま、思い設けぬこの恥辱のために満身かつかつとほてつて、蚊のなくが如き声して、いま所持のお金きつちり三十銭、私の不注意でございました。なんとか助けて下さい、と懇願しても、その三十歳くらいの黄色い歯の出た痩せこけた老婆、ろくろく返事もなく、規則は規則ですからねえ、と呟いて、そろ

ばんぱちぱち、あまりのことに私は言葉を失い、しょんぼり辞去いたしました。が、篠<sup>しの</sup>つく  
 雨の中、こんなばかげたことがあるうか、まごうかたなき悪玉、私うまれてこのかた二十  
 八年、あとにもさきにも、かの女事務員ひとり、他は、すべて、私と同じくらしいの無心の  
 善人でございました。いまのあの編輯人の無礼も、かれの全然無警戒のしからしめた外貌  
 にすぎない。作家というものは、なんでもわかつて、こちとらの苦しみをすべて呑みこんで  
 いるのだ、怒り給うことなし、ときめてしまつて甘えて居る。可愛さあまつて憎さが百倍  
 とは、このことであろうか、などと一文の金もなき謂わば賤民、人相よく、ひとりで呟い  
 てひとりで微笑んでいた。私は、この世の愚昧<sup>ぐまい</sup>の民を愛する。

九唱 ナタアリヤさん、キスしましょう

その翌、翌日、まえの日の賤民とはちがつて、これは又、帝国ホテルの食堂、本麻の蚊  
 がすり、ろの袴<sup>はかま</sup>、白足袋<sup>たび</sup>の、まごうかたなき、太宰治。ふといロイド眼鏡かけて、ことし  
 流行とやらのオリソニックブルウのドレス着ている浅田夫人、幼な名は、萱野<sup>かやの</sup>さん。ふた  
 り涼しげに談笑しながら食事していた。きのう、私、さいごの手段、相手もあろうに、萱

野さんから、二百円、いや、拾円紙幣二十枚お借りした。資生堂二階のボックスでお逢いして、私が二百円と言いまおわらぬうちに、三度も四度もあわてて首肯うなずき、さつと他の話にさらつていった。二時間のち、同じところで二十枚のばいきんだらけのくしゃくしゃ汚き紙片、できるだけむぞうさに手交して、宅のサラリイ前借りしたのよ、と小さく笑った萱野さんの、につつき嘘、そんな端々にまで、私の燃ゆる瞳の火を消そうと警戒の伏線、私はそれを悲しく思った。その夜、花の都、ネオンの森とやらの、その樹樹のまわりを、くぐり抜け、すり抜け、むなしくぐるぐる駈けずりまわった。使えないのだ。どうしてもそのお金を使えないのだ。奴婢ぬひの愛。女中部屋の縁へりのない赤ちやけた畳、びんつけ油のにおい、竹の行李こつりの底から恥かしき三徳さんとく出して、一枚、二枚とくしゃくしゃの紙幣、わが目前にならべられて与えられたような気がして、夜明けと共に、電話した。思いがけぬ大金ころがりこんで、お金お返しできますから、と事務的の口調で言つて、場所は、帝国ホテル、と附け加えた。華麗豪壯の、せめて、おわかれの場を創りあげたかった。

その日、快晴、談笑の数刻の後、私はお金をとり出し、昨夜の二十枚よりは、新しい、別な二十枚であることを言外に匂わせながら、しかも昨夜この女から受けとつたままに、うちの三枚の片隅に赤インキのシミあつたことに、はつと気づいて、もうおそい、萱野さ

ん気づかぬように、気づかぬように、人知れぬ深い祈り、ミレエの晩鐘におとらず深き、人生の幕の陰の祈り。

「萱野さん、かぞえて下さい。きちんとして置こうよ。気まずさも、一時の気まずさも、生きて行くために、どうしても必要なことなのだから。」

言葉のままに、わかる女だ。こちらの気持ちも、そのまま正確にキャッチ、やや口ひきしめて首肯き、おぼつかなき風の手つきで、かぞえた。十七枚。ふと首かしげて、とつさに了解。薔薇は蘇生した。ゆつくり真紅含羞の顔をあげて、私の、ずるい、平気な笑顔を見つけて、小娘のような無染の溜息、それでも、「むずかしいのねえ、ありがとう。」とかしこい一言、小声でいうのを忘れなかった。そうして、わかれた。一万五千円の学費つかって、学問して、そうして、おぼえたものは、ふたり、同じ烈しき片思いのまま、やはりこのまま、わかれよ、という、味気ない礼儀、むぎんの作法。ああ、まこと、憤怒は、愛慾の至高の形貌にして、云々。

十唱 あたしも苦しゅうございます

おい、襖ふすまあけるとときには、気をつけてお呉れ、いつ何時、敷居にふらつと立って居るか  
知れないから、と某日、笑いながら家人に言いつけたところ、家人、何も言わず、私の顔  
をつくづく見つめて、あきらまにかかれ、発狂せむほどの大打撃、口きけぬほどの恐怖、唇  
までまつしろになつて、一尺、二尺、坐つたままで後ずさりして、ついには隣りの六畳ま  
で落ちのびて、はじめて人ごち取りかえした様子、声を出さずに慟どうこく哭ははじめた。家人  
の緊張は、その日より今にいたるまで、なかなか解止せず、いつの間やら衣紋えもんだけ竹を全  
廃していた。なるほどな、とそのときはじめて気づいたことだが、かの衣紋竹にぞろつと  
着物かかつて居るかたちは、そっくり、あの姿そのままでございました。そのほかにも、  
かれ、蚊帳吊るため部屋の四隅に打ちこまれてある三寸くぎ抜かばやと、もともと四尺八  
寸の小女、高所の釘と背のびしながらの悪戦苦闘、ちらと拝見したこともございました。  
いま庭の草むしっている家人の姿を、われ籐椅子とういすに寝ころんだまま見つめて、純白のホ  
オムドレス、いよいよ看護婦に似て来たな、と可哀そうに思っています。わが家の悪癖、  
かならず亭主が早死はやじにして、一時は、曾祖母、祖母、母、叔母、と四人の後家さんそろつ  
て居ました。わけても叔母は、二人の亭主を失った。

## 終唱　そうして、このごろ

芸術、もともと賑やかな、華美の祭礼。プウシユキンもとより論を待たず、芭蕉、トルストイ、ジツド、みんなすぐれたジャアナリスト、釣舟の中に在っては、われのみ簞みのを着して船頭ならびに爾余じよの者とは自らかたち分明の心得わすれぬ八十歳ちかき青年、××翁の救われぬ臭癩見たか、けれども、あれでよいのだ。芸術、もとこれ、不倫の申しわけ、

——余談は、さて置き、萱野さんとは、それつきりなの？　ああ、どのようなロマンスにも、神を恐れぬ低劣の結末が、宿命的に要求される。悪かしこい読者は、はじめ五、六行読んで、そつと、結末の一行を覗のぞき読みして、ああ、まづいまずいと大あくび。よろしい、それでは一つ、しんじつ未會有みぞう、雲散霧消の結末つくつて、おまえのくさった腹綿を煮えくりかえさせてあげるから。

そうして、それから、——私たちは諦あきらめなかつた。帝国ホテルの黄色い真昼、卓をへだてて立ちあがり、濁りなき眼で、つくづく相手の瞳を見合つた。強くなれ、なれ。烈風、衣服はおろか、骨も千切れよ、と私たち二人の身のまわりを吹き荒すざぶ思い、見ゆるは、おたがいの青いマスク、ほかは万丈の黄塵に吞まれて一物もなし。この暴風に抗して、よろ

めきよろめき、卓を押しつけ、手を握り、腕を掴み、胴を抱いた。抱き合つた。二十世紀の旗手どのは、まず、行為をさきにする。健全の思念は、そのあとから、ぞろぞろついて来て呉れる。尼になるお光よりは、お染を、お七を、お舟を愛する。まず、試みよ。声の大なる言葉のほうか、「真理」に化す。ばか、と言われた時には、その二倍、三倍の大声で、ばか、と言ひ返せよ。論より証拠、私たちの結婚を妨げる何物もなかつた。

「これが、おまえとの結婚ロマンス。すこし色艶つけて書いてみたが、もし不服あつたら、その個所だけ特別に訂正してあげてもいい。」

かの白衣の妻が答えた。

「これは、私ではごさいませぬ。」にこりともせず、きつぱり頭を横に振つた。「こんなひと、いないわ。こんな、ありもしない影武者つかつて、なんとかして、ごまかそうとしているのね。どうしても、あのおかたのことは、お書きになれないお苦しさ、判るけれど、他にも苦しい女、ごさいます。」

だから、はじめから、ことわつてある。名は言われぬ、恋をした素ぶりさえ見せられぬ、くるしく、——口くさつても言われぬ、——不義、と。

ああ、あざむけ、あざむけ。ひとたびあざむけば、君、死ぬるとも告白、ざんげしてはいけない。胸の秘密、絶対ひみつのまま、狡智こうちの極致、誰にも打ちあけずに、そのまま息を静かにひきとれ。やがて冥途めいじとやらへ行つて、いや、そこでもだまって微笑ほほえむのみ、誰にも言うな。あざむけ、あざむけ、巧みにあざむけ、神より上手にあざむけ、あざむけ。

もののみごとにだまされ給え。人、七度の七十倍ほどだまされてからでなければ、まことの愛の微光をさぐり当て得ぬ。嘘、わが身に快く、充分に美しく、たのしく、しずかに差し出された美事のデツシユ、果実山盛り、だまって受けとり、たのしみ給え。世の中、すこしでも賑やかなほうがいいのだ。知っているだろう？ 田舎芝居、菜の花畑に鏡立て、よしずで囲った楽屋の太夫に、十円の御祝儀、こころみに差し出せば、たちまち表の花道に墨くろぐろと貼り出されて曰く、一金壺千円也、書生様より。景氣を創る。はからずも、わが国古来の文学精神、ここにいた。

あの言葉、この言葉、三十にちかき雑記帳それぞれにくしゃくしゃ満載、みんな君への楽しきお土産みやげ、けれども非運、関税のべら棒に高くて、あたら無数の宝物、お役所の、青

ペンキで塗りつぶされたるトタン屋根の倉庫へ、どさんとほうり込まれて、ぴしやんと錠じようをおろされて、それつきり、以来、十箇月、桜の花吹雪より藪蚊やぶかを経て、しおから蜻蛉とんぼ、紅葉も散り、ひとびと黒いマント着て巷ちまたをうろつく師走にいたり、やつと金策成つて、それも、三十にちかき荷物のうち、もつとも安直の、もの数ならぬ小さい小さいバスケット一箇だけ、きらきら光る真しんちゆう鍬くわの、南京錠なんきんじようぴちつとあけて、さて皆様の目のまえに飛び出したものは、おや、おや、これは慮外、百千の思念の小蟹、あるじあわてふためき、あれを追い、これを追い、一行書いては破り、一語書きかけては破り、しだいに悲しく、たそがれの部屋の隅にてペン握りしめたまんま、めそめそ泣いていたという。

# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集<sup>2)</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年9月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年8月7日公開

2005年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二十世紀旗手

——（生れて、すみません。）

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>